

華岡青洲 14 種の膏薬と李靖十二辰陣

鈴木 達彦^{1,2)}, 足立理絵子³⁾¹⁾東京理科大学, ²⁾北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室, ³⁾ウチダ和漢薬

華岡青洲には『膏方便覧』や『春林軒膏方』といった膏薬の処方を書いた写本が多く伝わっており、そうした処方集に収載されている膏薬の中には14種類の特殊な名称がつけられたものが存在する。青洲の関係の医書に記されている「用膏三綱領」は、膏薬の使用法の大綱を示したものと考えられるが、ここで示されている膏薬は14種の膏薬が中心になっていることから、これらは青洲の膏薬療法の中核に位置する処方であると考えられることができる。14種の膏薬名は、それぞれ「大玄」「破敵」「左突」「青蛇」「摧兇」「前衝」「大赤」「先鋒」「右撃」「白雲」「決勝」「後衝」「中黄」「游奕」となっており、青洲の関係以外の医書にはあまり見ることができない。その名称は、『燈下医談』に「予家の膏名は唐、李靖の陣法に據する」と記されているように、李靖の陣法からとられているとみなせる。李靖は唐の太宗に仕えた著名な軍師であり、太宗と李靖の問答形式になっている『李衛公問対』が『武経七書』に引かれ、広く知られている。しかし、その『李衛公問対』には六花陣、八陣などが記されているものの、膏薬の名称と同じ陣名をみることができない。14種の膏薬名がみられるのは、宋代の曾公亮編『武経総要』に引用される十二陣である。十二辰陣は中央に置かれた陣のまわりに12の陣がおかれて、それぞれの方角の陣に十二支があてがわれる。これに「游奕」が加わった全部で14の陣があり、これらの陣名が14種の膏薬名に一致している。『武経総要』以前に成立した唐・李筌『太白陰経』や、『太白陰経』に依ったとされる宋・許洞『虎鈴経』には十二陣は見られない。一方、『武経総要』以後、その体系を受けたとされる明・唐順之『武編』には記載があり、『武経総要』の大部分を転載した明・茅元儀『武備志』には「十二辰陣図」として歩兵と騎兵を示した図も見られる。青洲の述べる李靖の陣形とは『武経総要』の系列から引用した十二辰陣であると考えられ、特に『武備志』は寛文4(1664)年の和刻本もあり、広く流布していることから直接の引用元である可能性が高いと思われる。

青洲が用いた内服薬については『瘍科方笈』や『春林軒丸散方』などの処方集が伝わっている。青洲が吉益南涯の門下にあったことから、一部に吉益流の十二律方が見えるが、それ以外は青洲の創方も含めて十二辰陣の膏薬にみられるような特殊な名称は見られない。そうした中で注目されるのは、『癸亥春林軒統薬方冊』にみられる処方名である。本書は青洲が乳がん手術を成功させる前年にあたる、比較的初期の治験録と考えられている。日本医史学雑誌において高橋、坂田、児玉により翻刻された資料にもとづくと、処方内容は不明であるが、「闕逢」「旃蒙」「著雍」「屠維」「重光」「玄默」といった処方が記されている。これは、木星と鏡像の位置に想定された仮想の星である「太歳」の方角で年を表す太歳紀年法で用いられる名称からとられたものであると考えられる。太歳紀年法は十干十二支による紀年法のもととなったもので、処方名に用いられた名称は十干と対応している。本書では以上の6種しか確認できないが、当時は十干にもとづいた10種の処方がそろっていたと推察されよう。これらの処方名は以降の青洲の医書にはなく、同時に『癸亥春林軒統薬方冊』には李靖の膏薬名は採用されていないので、太歳紀年法の処方名は李靖十二辰陣の膏薬に先立って、かなり早い段階でまとめられ、その後使用されなくなっていくと考えられる。青洲は太歳紀年法や李靖十二辰陣を引用し、十干十二支にもとづいて自身の処方の体系化を試みたと考えられる。

本研究は2011年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励の一環で行った。